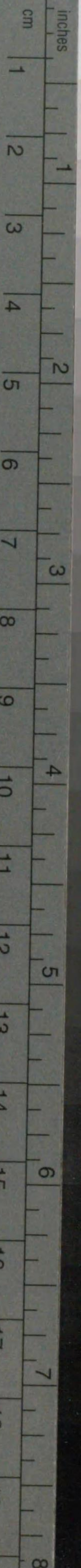


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

- A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

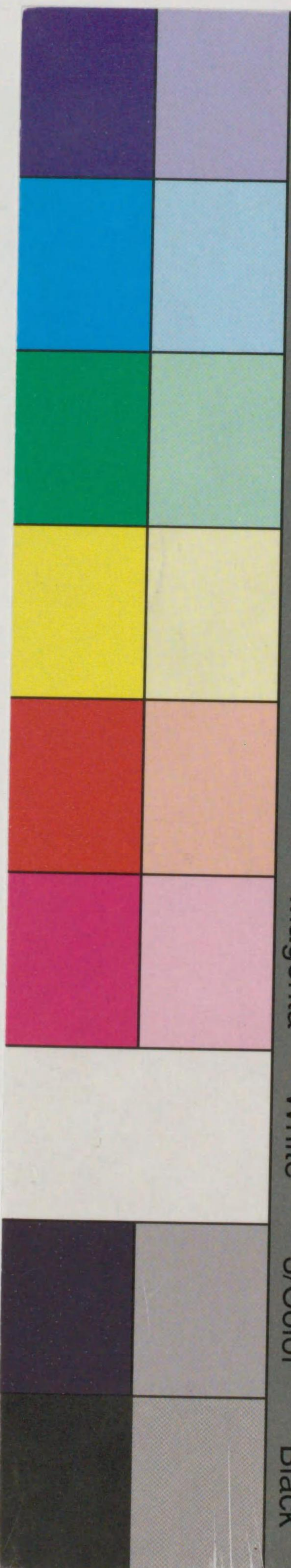
Red

Magenta

White

3/Color

Black



安樂集 協谷搦謙

安

樂

集

脇

谷

搦

謙

目次

はしがき……………三

一、教へと時と人……………五

二、説法の人、聴法の人……………六

三、觀佛三昧、念佛三昧……………八

四、三身三土……………一〇

五、三種の菩提心……………一三

六、異見邪執を破す……………一四

七、淨土の因果を明す……………一九

八、難行道、易行道……………三五

九、聖道門、淨土門……………三七

一〇、親鸞聖人の讃仰……………三〇

一一、十二大門……………三四

一二、疑議……………三六

はしがき

鸞師のをしへをうけつたへ
 綽和尚はもろともに
 在此起心立行は
 此是自力とさだめたり

——高僧和讃——

宗祖親鸞聖人は、かく讃仰せられました。曇鸞大師は東魏の孝靜帝興和四年に歿し、道綽禪師は陳の文帝天嘉三年に生れられました。その間凡そ二十年で、面授の師弟ではありませんが、禪師の入寺せし石壁の玄忠寺は、もと大師の住せしところであつて、寺中に鸞師の石碑あり、具さに其の事蹟を刻す。禪師これを讀みて、深くその徳化を慕ひ、遂に碑前にて師資の禮を執り、從來の涅槃經の講布を捨て、淨土門に歸したのであります。時に歳四十八でありました。それは隋の大業五年で、爾來専ら阿彌陀佛を念じ、觀無量壽經を講すること二百遍、唐の太宗貞觀十九年、八十四歳で入寂せられました。その著『安樂集』は一部二卷、十二大門三十八章五十五節、

經を引くこと四十二、論を引くもの六、觀無量壽經を中心として、遍ねく諸經論の要文を集め、以て往生淨土を勧められてありますが、特に曇鸞大師を相承するところ最も多く、しばしば彼の往生論註及び讚阿彌陀佛偈を引かれてあります。

一、教へと時と人

十二大門の第一が、明教興所由、約時被機勸歸淨土といふことで、筆を起されてあります。時代と人を離れて、教法のみ獨立するものではありません。教法が其の時代の人に適應すれば、行ひ易く、悟り易い。然るに其教法が、時代に適せず、人の求むるところに應じなければ、修行し難いと同時に、悟入することの出来るものではない。それゆへに、教法の興起するは、その教法が、時代と人々に適合するや否やを觀察するに懸つて居ると云ふのであります。若し濕木を攢つて火を求むれば火得べからず、若し乾薪を折つて水を覓むれば水得べからず、云ふまでも無く、時を知るの明がないからである。時とは何か、釋尊の滅後を凡そ五つの時代に分たれる。第一の五百年間が諸の弟子學慧の時代、第二の五百年間が學定の時代、第三の五百年間が多聞讀誦の時代、第四の五百年間が修福懺悔の時代、第五の五百年間が五訟鬪諍の時代である。かゝる時代に處して說法教化するに凡そ四種類ある。一には法施教化、二には身業教化、三に神通教化、四に名號教化である。當時(道綽禪師の)は果して如何なる時代で、いづれの教化を蒙るべき時であるか、世尊世を去つて後の第四の五百年で、正に是れ修福懺悔の時代にして、名號教化を蒙るべき時である。若し一念南無阿彌陀佛を稱ふるに、即ち能く八十億劫の

生死の罪を除く(觀無量壽經)。一念既に爾なり、況んや常念するは、即ち是れ常懺悔の人である。若し釋尊滅後日尙ほ淺く、第一第二の五百年時代であるならば、定慧を修學することを主として、傍ら修福懺悔の爲に稱名念佛すべきであるが、當今は釋尊滅後、時を歴ること遙遠にして智解浮淺暗鈍の時代であるから、懺悔稱名を主として、傍ら定慧を修すべき時である。是れ觀無量壽經の教説起りし所以で、韋提希夫人は自ら幽囚の苦難に遭ひて往生淨土を忻求すると共に、末世五濁の流轉生死の人々の爲に、出路を請問したのであるが、釋尊爲に慈教を垂れ給ひ、往生淨土の道路を開示せられたのであります。之が淨土教の興りし起原で、同時に亦道綽禪師が此の『安樂集』を遺せし所以ともせられて居るのであります。そのゆへは、若し往生淨土の教を求むる爲に、衆典を披尋するならば、勤むるところ彌多多く、歸趣するところに迷ふであらう。それゆへに、經論の眞言を採集して修道の助けとし、前に往生する者は後を導き、後にゆくものは前を訪ねて、連續無窮にして無邊の生死海を盡さんが爲だと云つて居られます。

二、説法の人、聽法の人

既に約レ時被レ機勸歸淨土といはれた、時代と人とに相應して教法を勸むべしといふのであるが、其の説法者と其の聽法者が、恰も函と蓋との相應するが如くで無ければならぬ。茲に説法者の方軌が説かれてある。それは説法者は醫師の如く、必ず病苦を除くの想をなせ、所説の法は甘露の如く、醍醐の如しと想へ、其の聽法者は能く法を咀嚼し領解して愈病の想をなせ。若しかくの如き説法者であるとすれば、皆佛法を紹隆するに堪へたるもので、常に佛前に生るゝであらうといふのである。之が即ち樂説法の人、樂聽法の人で、説法者は法を説くことを樂む人で無ければならぬ。法を説くことを樂むとは、一心を法の中に入れて、法と我れと一如になることである。法を聽くことを樂むとは、聽くところの法に對しては、恰も渴して水を飲む如く、一心を其語議中に入れて、説者の語議と聽者の心と一如になり、法を聞いて身心踊躍歡喜の境地に住することである。かゝる説法者との相會ふことが、所謂機緣純熟で、一朝一夕の事ではない。舍利弗、目連は、佛弟子中の智慧第一人者、神通第一人者と稱せられて居る。それは何故か、彼等宿世に於て、法を説き、法を聽く爲には、千里を遠しとせずして説聽した。その爲め智慧第一人者、神通第一人者となつたものだと説かれてある。之を稱して宿善、宿因、宿福、宿緣等といふ、五百の本生譚が即ちそれで、説法聽法に就て、忘れてならないことである。

宿善とは宿世の善で、宿は宿昔、往昔の世から集積せし善因の今現はれて、法を説き、法を聽くことを得たるを慶ばねばならぬ。故に經には、若し人善本(宿善)無ければ此の經を聞くことを得ず、清淨有戒の者乃ち正法を聞くことを獲む、かつて世尊を見たてまつりしもの、則ち能く此事を信ず、謙敬にして聞きて奉行し、踊躍し

て大に歡喜す、憍慢懈怠なるは此の法を信じ難し、宿世に佛を見たてまつりしもの、如是の教へを樂聽せんと説かれてある。吾れ等今既に宿善開發して法に遇ふことを得たり、此の法を聞いて信心歡喜すれば、淨土に往生して成佛すべし、幸慶何ものか之に過ぎん、宿善ありがたしと驚喜すべきことである。

若し又淨土の法門の廣開せる時に會ひ、しばし之を聞くと雖も信心を生じない人は、これ宿惡の重き人、即ち憍慢懈怠の人である。憍慢懈怠では、法を聞くも信ずること不可能である、須らく謙敬にして法を聞き、法の如く奉行すべきである。故に滿千界の火をも必ず過ぎて、もともと法を聞くなれば、かならず當に成佛すると説かれてある。されば宿善厚き人は法に遇ひ易く、宿惡重きものは法に會ひ難いが、宿善宿惡が往生成佛の因では無い。善惡の二つは宿世の因にまかせて、往生の大益をば聞いて信ずる法の威力ひかり、即ち如來の他力にまかせてまつるべしと云ふのである。

三、觀佛三昧、念佛三昧

既に説聽の方軌に就て、宿因の深厚なりしを慶ぶべしと説いた、それが即ち韋提希夫人の爲に説かれた觀無量壽經である。故に次に觀經の宗旨を明して「今此の觀經は、觀佛三昧を以て宗と爲す、若し所觀を論ずれば依正

に過ぎず、下の所觀に依りて辨ずるところの如し」と云れてある。所觀の境は、淨土の依報と正報で、乃ち定善十三觀であるが、上中下三輩の人々が、此の淨土の依正二報に於て、各々自ら往生の想をなすが故に、開いて九品となし、之を散善として、始終通じて十六觀と云ふ。それゆへ「今此の觀經は觀佛三昧を以て宗と爲す」といはれたのである。けれども、之は韋提希夫人の請ふところに就て觀佛三昧を宗と爲すと云はれたもので、之が即ち十三觀の定善であるが、之ればかりでは定機の爲のみの説法となりて、散機を漏すことになる。故に次の三輩九品くぼんには、韋提の請はざるに、釋尊自ら三福の行を開説し、以て散機のものを導かれた。三福とは世間の善と、小乗の善と、大乘の善である。之を説ける三輩九品の下輩三品に、南無阿彌陀佛の念佛行が説かれてある。此の念佛が、觀經を説ける釋尊の正意である。それゆへに、今此の觀經は、觀佛三昧を以て宗と爲すとは云つたけれども、その内容は、念佛三昧の功德の超勝せることを明すにあつた、伊蘭林の方四十由旬なるあり、唯臭くして香はしきことなし、若し其の花果を噉へば、發狂して死す、此所に一科の牛頭梅檀ごすせんたんあり、根芽漸やく生長して樹となるに、香氣昌盛にして、遂に能く此の林を變じて、皆悉く香美ならしむ。一切衆生の生死の中に於ける念佛の心も亦かくの如し、但能く念を繋けてやまざれば、定めて佛前に生れん、一たび往生を得れば、即ち能く一切の諸惡を變じて、大慈悲を成就せんこと、彼の香樹の伊蘭林を改むるが如し。伊蘭林は衆生身内の三毒三障無邊の重罪の如く梅檀は衆生の念佛の心の如し、纔に生長して樹と成るとは、能く念を積みて斷へざれば、業道成辨

するに喩ふるのである。又獅子の筋を以て琴の絃と爲し、一たび之を奏するに、餘絃皆斷壞するが如く、菩提心の中に念佛三昧を行へば、一切の煩惱、一切の諸障、悉く皆斷滅す。又牛羊驢馬一切の諸乳を取りて一器に入れ、獅子の乳一滴を之れに投ずるに、一切の諸乳悉く皆變じて清水となるが如く、人能く菩提心の中に念佛三昧を行すれば、一切の惡魔諸障逃れ去る。又翳身の藥を持ちて處々に遊行するに、餘人之を見ざるが如く、人能く念佛三昧を行すれば、一切の惡神、一切の諸障、是の人を見ず、詣るところすべて遮障するもの無し、蓋し是れ念佛三昧は、一切三昧中の王なるが故だと説いてある。それゆへに下の第四大門には、獨り觀經のみならず、諸經多く念佛三昧を明すを宗と爲すと云つてある。

四、三身三土

釋尊の觀經を説かれし正意は、念佛して淨土に往生せしむるに在る。念佛とは、阿彌陀佛を信じて、其の名號を稱ふることである。阿彌陀佛とは如何なる佛か、淨土とは如何なる國土か、次の三身三土の義は、之を明らかにするのである。三身三土とは、法身の淨土、報身の淨土、化身の淨土である。法身とは如來の眞法身で、無色、無形、不可見、無言説、無住處、無生無滅の神如法性である。此の法身が報身と現れて、淨土中に成佛する、從

て眞垂報の佛身を報身と云ふ。此の報身が、衆生の心行に隨つて種々身を化現す、之を化身といふのである。それゆへに淨土中成佛は悉く是れ報身、穢土中成佛は悉く是れ化身と云ふ。諸佛には凡て此の三身まします、釋尊の報身は、無勝莊嚴の淨土に成佛して居らせられる。菩提樹下に成道せられしは、衆生教化の爲に化現せられし化身である。西方極樂世界に現在説法して居られるが、報身の阿彌陀如來で、清泰國に現はれて、父母あり子ある阿彌陀如來は化身である。此の義を辨へずして、阿彌陀如來の極樂淨土を化身化土だと云ふ者がある。報身報土なくして、化身化土のみはあられない。若し極樂淨土の阿彌陀如來が、化身化土ならば、阿彌陀如來の報身報土は、いづれにましますとするや。之を毫毛に錯りて、之を千里に失ふといふことがある、廣く經文を熟讀して、眞の佛意を領得せねばならないことである。而して此の三身三土は各別のもの無く、報身は從て眞垂報で、眞法身より顯はれたるが報身であり、又從て報垂化で、報身の化現せるが化身である。皆是れ衆生教化の爲めで、其の體は一である、日光天下を照すが如く、法身は日の如く、報化は光の如し。衆生の機感不同なるが故に、教化の示現また同じからず。或は劫火世界を燒盡して天地洞然、以て衆生の常想を照破して無常を知らしめ、或は佛の足指を以て地をうてば、三千世界嚴淨ならざるなきが如き、衆生をしてまのあたりに嚴淨の世界を欣求せしむるのである。されば如來の眞法身が、即ち如來の眞實智慧であり、眞實の智慧は衆生界の妄想なるを知る。衆生界妄想なりと知れば、是れを救濟する眞實の慈悲を起す。既に妄想なりと知るから、知るところの實物は無

い。されば實相は無相であり、眞知は無知である。無相の故に相ならざる無く、無知の故に知らざるところ無し。この故に三身即ち一身であり、如來眞法身の教化救濟、到らざるところは無い、之を報身如來の實相とするのである。

五、三種の菩提心

佛土には三身三土まします、其の淨土に往生する、須らく三種の菩提心を發さねばならぬ。それは法身の菩提と報身の菩提と化身の菩提である。法身の菩提とは、眞如實相第一義空、自性清淨にして體汚染なく、理天真に出で、修成を假らない、佛道の體本來菩提なるを云ふ。須らく有無本來自性清淨なりと識達せねばならぬ、之を法身菩提と云ふのである。報身菩提とは、備さに萬行を修して能く報佛の果を感じ、果を以て因に酬ひ、八萬四千の諸波羅蜜、圓通無礙なるを云ふのである。化身菩提とは、報身より作用を起して、能く萬機に趣き、衆生を教益すること圓通自在なるを云ふのである。そも、菩提とは佛道の名で、此の三種の大菩提と相應するを、菩提心を發すと云ふのである。此の心廣大にして法界に遍く、此の心究竟せること虛空の如く、此の心長遠にして未來際を盡す、若し能く一たび此の心を發せば、無始已來の生死を離れ、あらゆる功德を菩提に同向して、遠く

佛果にいたり失滅することは無い。されば淨土に往生せんと欲するものは、かならず菩提心を發さねばならないが、往生淨土の菩提心は、之を要約して願作佛心度衆生心と云つてある。此の二心は各別のもので無く、願作佛心が即ち度衆生心で、度衆生心とは、衆生を攝取して、佛國に往生せしむる心であり、之が即ち願作佛心であるのである。菩提心とは菩提を求むる心であるが、菩提は求めて得らるゝもので無く、心でも得られなければ、身でも得られない。なぜなれば、菩提を求むれば菩提の爲めに縛せられ、求めざるも亦縛せらる。同時に又菩提を求めれば解脱し、求めざるも亦解脱する。それはなぜであるか、有と思ひ、無と思ひ、有無と思ひ、非有無と思ひのがよくない。此の四句を離るれば、有と思ふも解脱し、無と思ふも解脱し、有無と思ふも解脱し、非有無と思ふも解脱す。故に四句を離れざれば縛せられ、四句を離るれば解脱すと云はれてある。菩提心の修行も亦かくの如く、修行而不行、不行而行でなければならぬ。それは果してどうすることであるか、謂く、菩提に相違する三種の法を離れて、菩提に隨順する三種の法を修することである。之は別のことでは無く、相違の法を遠離すれば、菩提に隨順するのである。一には智慧に依つて、自樂を求めてはならない、須らく、自身に貪着する心を遠離すべきである。二には慈悲によりて、一切衆生の苦を抜き、衆生を顧みないといふ心を遠離せねばならない。三には方便に依りて一切衆生を憐愍し、苟も自身を敬ひ養ふ心を遠離せねばならない。之を菩提相違する三種の法を遠離するといふのである。菩提に隨順する三種の法とは、一に菩提は無染清淨の處である、それゆへに自樂を求

めざれば、菩提に隨順するのである。二に菩提は安清淨の處である、されば一切衆生の苦を抜けば、一切衆生を安穩にする、故に菩提に隨順するのである。三に菩提は樂清淨の處である、故に一切衆生を憐愍して、畢竟常樂を得しむれば、則ち菩提に隨順するのである。之を要するに、苟くも自身を住持するを樂しみとせず、凡て苦惱の一切衆生を救濟するを以て能事とする、之れが眞正の發菩提心だと云ふのである。かゝる大義、果して何に由りてか獲る、大義は即ち大乘であり、第一義乘である。第一義乘とは何か、安樂佛國これなり、阿彌陀如來の極樂世界が、即ち第一義乘である。故に一切衆生をして、一心專念に彼の國に往生を願はしめ、速に無上菩提に會はしめねばならない。之れが願作佛心即ち度衆生心の、發菩提心だと云ふのである。

六、異見邪執を破す

阿彌陀如來の安樂淨土は、是れ大義門であり、第一義乘である。それゆへに、安樂淨土に往生することが、無上菩提に達する畢竟道で、茲に願作佛心即度衆生心の發菩提心が定まるのである。然るに大乘の經典は、小乘及び俗書の如く、文を通讀しただけで、眞意を領解することは出来ない。一名に無量の義あり、一義に無量の名あるから、遍ねく衆典を審にして、其の旨趣を曉めねばならぬ。凡情を以て卒爾に圖度しては、傷執雜亂して、往

生の菩提心を妨礙することになる。かくて起れる異見邪執を料簡して、邪を去り正に向はしむるに凡そ九門あり。第一には大乘無相の説を妄執して、願生淨土を破する者がある。之は佛説にはかならず二縁を具することを知らざるより起れる偏執である。二縁とは法性の實理と、二諦に隨順することである。法性の實理は無性であると同じ時に即生で、二諦隨順して違ふところは無い。それゆへに、淨土及び衆生本來空なりと觀じて、而も常に淨土を修めて衆生を教化する、又無作を行じて現に其の身を受け、無生を行じて常に一切の善行を起す、之が菩薩の行であり、而して其の眞證である。然るに但法性無相の理のみに依りて、縁生有相を無視するは、之れ滅空の邪執で、二諦隨順の正理では無いのである。

第二には愛見の大悲は捨離すべしといふに執着して、衆生を勸めて淨土に生ぜしむるは愛染取相に非ずやといふ者がある。之は菩薩の行に二種あることを知らざる迷執である。二種の行法とは、一に空慧を證ると、二に大悲を行ふとである。空慧を證るが故に、六道生死の中に入りても繫縛せられず、大悲を以て衆生を念ふが故に涅槃にも住しない。菩薩は二諦に隨順して而も常に能く有無を離れ、中道の理に違はないのである。譬へば人あり、空地に官舎を建てんとすれば、意のまゝに建つることを得るが、虚空に於てせんとすれば、終に能はざるが如く、菩薩も亦爾り、衆生をして菩提心を成就せしめんが爲に佛國を莊嚴す、佛國を莊嚴するは空に非ざるなり。

第三には心外無法を偏執して西方往生を破する者あり、謂く所觀の淨境は内心に在り、心外に法無し、何ぞ西

に入るべきと。之は無生の生を知らざるより起る偏執である。法性の淨土は理虚融にして偏局するところ無し、此れ乃ち無生の生にして上土は入るに堪へたり、中下の輩はかならず信佛因縁に依りて淨土に生ず、若し縁を攝めて本に従へば、即ち心外に法無し、若し二諦を分ちて義を明せば、淨土是れ心外の法たるも妨げは無いのである。譬へば嬰兒若し父母の扶養によらずんば、或は阨井に墜落し、或は火傷毒虫等の災難に遇ひ、或は乳なくして死するに至らん、かならず父母の愛撫養育をかりて方に長大し、家業を繼承すべきが如く、菩薩も亦爾り、若し能く菩提心を發して淨土に生れんと願ひ、諸佛に親近して法身を增長し、方に能く菩薩の家業を繼承して普ねく衆生を濟度す、故に多く願生するのである。又鳥子翹翹未だ成らざれば、逼りて高翔せしむべからず、先づ林に依り、樹を傳はしめ、羽翼成りて力あるに至り、方に林を捨て空に飛ばしむべきが如く、菩薩も亦爾り、先づ佛願に乗じて佛前に生ずることを求め、法身成長して機感に赴き化益を施すべし。淨土に往生すれば一切の事畢竟して成就す、凡て議論の要は無いのである。

第四には穢國に生じて衆生を教化せんと願ひ、淨土に往生せんことを願はない者がある。其の志や壯とすべきであるが、それは自身已に不退の位に住した已上の人の事である。不退位已上の人ならば、雜惡の衆生を教化せんが爲に、恒に惡處に入りて、惡に染まることは無い。恰も鵝鴨水に入りて、水に溺れないやうなものであるが、若し實の凡夫であるならば、自行未だ確立して居ないから、彼れを濟はんと欲して却て相與に没すること、鷄を追ふて水に入れたやうなもので、直ちに溺れて了ふ。譬へば四十里もあるやうな氷海に、人あり一升ばかりの熱湯を注げば、氷少しく減ずるやうであるけれども、一夜明くれば却て他よりも高く氷れるやうなもので、凡夫此所に在りて發心し、苦を救はんとするも亦かくの如く、貪瞋の境界違順多きが故に、自ら煩惱を起して返て惡道に墮するのである。

第五には、淨土は唯樂事のみであるから、多く喜んで樂に著し、修道を妨ぐ、何ぞ往生を願ふべけんやと云ふ者がある。既に淨土と云ふ、衆穢あること無きは云ふまでも無い。然るに若し樂に著すといふ、すなはち是れ貪愛煩惱である、何ぞ淨土と名くることを得んや。故に彼の國の人天は、往來進止、こゝろに繋るところなしと云ひ、又十方の人天、我國に來る者、若し想念を起して身に貪計せば正覺を取らずと誓はれてある、何ぞ著樂の理あらん哉。第六には、淨土に生れんと求むる者は、是れ小乘なりといふ者がある。小乘教には絶て淨土に生るゝことを明さないから、之は論ずるに足らない妄執である。

第七には、兜卒に生れんと願ふて西方淨土に願生しない者がある。けれども之は比對すべきでない。兜卒には彌勒菩薩、其の天衆のために不退の法輪を轉じて居られる、法を聞て信を生ずる者は利益を獲るが、樂に著して信無き者其數多し、又來りて兜卒に生るゝも位是れ退處であり、壽命また四千歳であるから、命終れば退落を免れず。兜卒天上水鳥樹林、和鳴哀雅なるありと雖も、但諸天生樂のために縁と爲りて五欲にしたがひ聖道を資け

す。若し夫れ彌陀の淨國に向つて一たび生るゝことを得る者は、悉く不退轉の人にして、更に退人の雜居すること無し。國土は無漏の淨土にして三界を出過し、復輪廻せず。其の壽命を論すれば佛と齊しく皆無量壽である。又水鳥樹林は皆能く說法して、人をして無生を悟らしめ、自然の音樂は法音清和にして心神を悦ばしめ、哀婉雅亮にして十方に超過して居るのである。

第八には、十方淨土に願生して、西方淨土に生るゝことを願はない者がある。之は心境相應といふことを思はない者で、境寛なれば則ち心味く、境狭ければ則ち意專一に定まるものである。而して一切衆生、濁亂の者は多く、正念の者は少い、是の故に衆生をして專志ならしめんが爲に、偏に西方淨土を讚歎するのである。特に此の娑婆世界は穢土の終り、安樂世界は淨土の初門で、境次相接して往生甚だ便である、是の故に諸佛偏に西方往生を勸むるのである。

第九には攝大乘論と觀無量壽經との相違に就て、別時意語を料簡せば、觀無量壽經の小品下生の人、現に重罪を造り、命終る時に臨みて善知識に遇ひ、十念成就して即ち往生を得と説いてある。攝大乘論の説に依れば、之は佛の別時意語なりと云ふ。而して攝論宗の人々は、觀經の此の文を判して、臨終の十念はただ往生の因となるのみで、即得往生では無いと云ふ。なぜなれば、攝大乘論に一金錢を以て千金錢に買へ得るに、一日にして即ち得るに非るが如しとあり。されば十念成就は但因となることを得るのみで、即得往生ではない、故に別時意語と

名くと云ふ。かくの如く解釋すること恐くは不然。なぜなれば、凡そ菩薩の論を作つて經を釋することは、遠く佛意を扶けて、眞意に契はしめんが爲めである。然るに論の文が經に違ふといふことは、あり得べからざることである。今論の別時意語を解釋せば、謂く、凡そ先因後果を明すことは、佛説法の常理である。されば觀經の中に、但一生罪を造りて命終時に臨み、十念成就して即得往生と説き、過去の有因無因を論ぜざるは、當來造惡の者を引接して、其の臨終に惡を捨て善に歸し、念に乗じて往生せしめん爲に、其の宿因を隠したものである。此は是れ世尊、始を隠して終りを顯はし、因を没して果を談じたもので、かくの如きを別時意語と云ふのである。されば十念成就とは、皆過去の因ありて虚しからず、若し彼の過去に因なくんば、善知識尙ほ逢ふべからず、云何に況んや十念を成就すべけんや。かくの如く解釋すれば、即ち上佛經に順ひ、下論意に合す。即ち是れ經論相扶けて往生の路通じ、復疑惑すること無きなり。

七、淨土の因果を明す

前に九番の料簡を以て邪執を破し、願生淨土の正義なることを明にした。次に十一番の問答を以て、念佛往生に就ての疑難を拂ひ、淨土の因果を鮮明してある。先づ問て曰く、一切衆生曠劫已來、つぶさに有漏の業を造り

て三界に繫屬して居る。然るに三界の繫業を斷ぜず、少時阿彌陀佛を念じて直ちに往生を得、すなはち三界を離せば、業繫の義果して如何。答て曰く諸佛如來には不思議の智力ありて、能く少を以て多と作し、多を以て少と作し、近を以て遠と爲し、遠を以て近と爲し、輕を以て重と爲し、重を以て輕と爲す。譬へば百夫百年、薪を集めて積むこと千仞、豆ばかりの火にて焚くに半日にして盡すが如し、豈に百年の薪、半日にして盡さずと言ふべけんや。又癖者も船に乗れば、風帆の勢にて一日千里に達す、豈に癖者一日千里に至らずと言ふべけんや。又十圍の索は千夫も制せず、童子劍を揮へばたちまちに兩分す、豈に童子の力、索を斷たずと言ふべけんや。凡そ萬法には皆自力他力、自攝他攝あり、千開萬閉、無量無邊なり。汝豈に有礙の識を以て無礙の法を疑ふことを得んや。五不思議中、佛法最も不可思議である。汝三界の繫業を以て重しと爲し、少時の念佛を疑ふて輕しと爲し、安樂國に往生して正定聚に入ることを得ずとは然るべからざる事である。

又問ふ業道は秤の如し、重き處先づ牽くとは佛教の定説である。衆生一たび生れて或は十年、或は百年、乃至今日、惡として造らざる無し、然るに命終るに臨みて十念相續し、即ち往生することを得と云はゞ、重きもの先づ牽くの理、云何が信すべき。答へて云く、汝は一生の造惡を重しと爲し、下品の十念を輕しと爲すやうであるが、抑も何を以て輕重を定むるのであるか、時間の長短や、數量の多少を以て、輕重を分別すべきでは無い。輕重の分るゝところは心に在り、緣に在り、決定に在るのである。心に在るとは、造罪の時は、虛妄顛倒の心に依

りて生じ、十念相續は、實相法を聞くに依りて生ず、一は實にして一は虛、全く比較することを得ないのである。たとひ千歳の闇室なりとも、光り若し至れば即ち明朗なる如く、千歳と一瞬と、時の長短を以て、明闇の輕重を量るべきでは無い。緣に在りとは、造罪の時は、煩惱果報の衆生に依りて生ず、十念相續は、阿彌陀如來の眞實清淨の名號に依りて生ず。緣亦比較すべきで無い。決定に在りとは、時間に間隙の無いことである。造罪の時は平生で、前後を顧慮する有後心、有間心であるが、終焉に臨みたる十念は、前後を顧慮する暇なき無後心、無間心で、唯十念相續するばかりである。故に必ず往生することを得と云ふのである。

又問て云く、いふところの十念とは、果して幾何の時間なりや。答ふ百一の生滅を一刹那とし、六十の刹那を一念といふのであるが、今十念といふは、そういふ時間を云ふのでは無い。但阿彌陀佛を念じて他事を緣せず、業道成辨するを十念と云ふ、煩はしく念數を記するのでは無いのである。

又問て云く、今勸めに依りて念佛三昧を行ぜんと欲す、念の相狀果して云何。答て云く、人あり空曠の處に於て、怨賊拔刀して殺さんと欲するに遇ふ、徑ちに走りて河岸に到る。謂へらく、我れ脱衣して渡るべきか、將た着衣のまゝにて浮ぶべきか。脱衣せんとすれば恐らくは其の暇なからん。着衣のまゝにて浮ばゞ身首全からじ。その時但河を渡ることのみ心を專注して、餘の心想雜ること無し。臨終の念佛も亦かくの如く、佛の本願を念じて稱名し、專至相續して斷へざれば、定めて往生を得るのである。

又問て云く、佛の本願には十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺とあり、然るに下品の臨終十念の教へを聞き、現在一生の間全く意を用ゐず、命終る時に臨みて方に念佛せんと欲す、此の事果して云何。答へて云く、十念相續豈に易からんや、諸の凡夫、心は野馬の如く、識は猿猴よりも劇し、六塵に馳騁して曾て未だ停息せず、各々宜しく信心を發して、預じめ自ら刻念し、須らく積習して堅固の性を成すべし。樹先づ傾倒せんとするや、必ず曲れるに隨ふが如く、命終る時に臨みて彌陀の名號を稱へ、安樂國に生れんと願ひて聲々相次ぎ十念成就して、命斷ゆる時即ち安樂國に往生すること、恰も蠟印を泥に印するに、印壞して文成るが如くならん、故に預じめ刻念すべきである。

又問ふ、一切衆生畢竟無生なること虚空のごとしとは、大乘佛敎の定説である。然るに龍樹菩薩、天親菩薩の如き、皆願生するは何故なりや。答ふ、衆生畢竟無生なること虚空の如しと言ふには二種の義がある。一には凡夫の見るところの如き實の衆生、實の生死等は、若し菩薩の往生に據れば、畢竟虚空の如く免角の如し。二には今生と言ふは因縁生なり、因縁生なるが故に即ち是れ假名生なり、假名生なるが故に即ち是れ無生にして、大道理に違はず、凡夫の實の衆生、實の生死ありと謂ふが如きものではないのである。又問ふ、夫れ生は有(迷ひ)の本であり、衆累の元である。若し此の過失を知りて、生を捨て無生を求むるならば、解脱を期することが出来やう。今既に淨土に生ずることを勸む、即ち是れ生を棄て、生を求むるもの、生何ぞ盡くすることあらんや。答ふ、

彼の淨土は乃ち是れ阿彌陀如來の清淨本願より生起せる無生の生であり、衆生の愛染虚妄の執着の生の如きではないのである。夫れ法性は清淨にして畢竟無生である、而も生と言ふは得生者の情謂に就ていふばかりである。問ふ、言ふところの如く生即無生と知るは、是れ上品生の人なるべし。今下品生の人、十念に乗じて往生するは、豈に實生を取るに非ずや。若し實生ならば無生のために因とならず、往生を得ざるべし。答ふ、之には次の如き三種の深き意義がありて、必ず往生を得るのである。一には、摩尼の寶珠を濁水に置くに、珠の威力を以て水即ち激清なるが如く、若し人、無量生死の罪濁ありと雖も、阿彌陀如來の至極無生、清淨寶珠の名號を聞て、之を濁心に投ずるに、念々の中、罪滅して心清淨となり、即ち往生するのである。二には、摩尼の寶珠を玄黄の帛に包みて、之を水に投ずるに、水即ち玄黄となる如く、彼の清淨の佛國には、阿彌陀如來の無上寶珠の名號あり、無量の功德を成就せる帛に包みて、之を往生者の心水に投ずるに、豈に生を轉じて無生の智と爲すこと能はざらんや。三には、氷上に火を燃すに、火勢猛んなれば氷解け、氷解くれば火則ち滅する如く、彼の下品往生の人、法性無生を知らずと雖も、但佛名を聞て往生の意をなし、彼の國に生れんと願ひて、既に無生の世界に至れば、見生の火自然に滅するのである。以上之を要するに、佛名の威力、佛國の徳、信仰の正因に依り、往生を願ふて、無生の悟りに達することを得るのである。

又問ふ、如何なる身にて往生するや。答ふ、生は是れ因縁生なりと言へり、因縁生は假名の人身である。此の

世の假名の身で念佛を修したるが、淨土の假名の身のために因となりて往生す。淨穢は異なれども始終是れ一の念佛行者である。かくの如く、前念後念の因果相續によりて往生するのである。

又問ふ、人能く佛の名號を稱ふれば、諸の罪障を滅して往生すといふ。爾らば佛體と佛名と全く同じきや。譬へば人あり、指を以て月を指すに、此の指能く闇を破すべきや。答ふ、諸法萬差なり、一概すべからず、名と法と即するもあれば、名と法と異なるもある。月を指すの指は、月と指と異なるもので、佛名を稱ふるは、佛と佛名と即するものである。故に佛名を稱ふれば、諸の罪障を除きて淨土に往生することを得るのである。

又問ふ、人能く彌陀の名號を稱念しながら、無明猶ほ在りて、祈願を満足せざるは何故なりや。答ふ、それは實の如く修行せず、名義と相應しないからである。彌陀の名號は南無阿彌陀佛であり、是れが實相身であり爲稱身であるのである。實相身とは佛の智恵で、爲物身とは佛の慈悲である。而して之が別なもので無く、實相身が即ち爲物身で、佛智がそのまゝ衆生のものとなるのである。此の名義を知らないから、名號を自分に領受せず、無明猶ほ在りて祈願を満足しないのである、之を不如實修行と云ふ。如實の修行には三種の相應がある。一には信心が淳でなければならぬ。心不淳では存亡常で無い。二には信心が一でなければならぬ、信心一ならざれば決定するところが無い。三には信心が相續せねばならぬ、心相續せざるは餘念が雜はるからである。若し能く相續すれば則ち是一心で、但能く一心なれば即ち是淳心である。かくの如く三心相應すれば、必ず往生することを得るのである。之を如實修行相應と云ふ。

八、難行道、易行道

上來廣く外の妨難を釋明した。茲に自己の宗とするところを開顯せんとし、先づ集主自らの現實を表白して、余既に自ら火宅に居り、實に想ふて怖れを懷く。仰で惟みるに、大聖三車の招慰、しばらく羊鹿の運、權息未だ達せず。佛邪執の上求菩提を障ることを訶したまう、縦ひ後に回向するも、仍迂回と名く。若し徑ちに大車に攀づるも亦是れ一途。只恐る、現に退位に居て、嶮徑遙に長く、自徳未だ立たず、昇進すべきこと難しと云へり。大聖三車の招慰とは、法華經に出でたる譬喩で、長者宅内の諸子を火難より濟はんとて、門外に羊車、鹿車、牛車あり、早く出で、好むところを得べしと誘ふた。諸子先を争ふて出づるに三車は無く、長者ために等一の大白牛車を諸子に與ふとある。三車は聲聞、緣覺、菩薩の三乘に喩へたもので、聲聞緣覺の二乘は之れ小乗なれば誘引の爲めの權教であるが、その小乗にだも未だ達せず。たゞちに大車に乗るの道もあるが、現に退位に居て前途甚だ遼遠である。自徳未だ立たずして昇進せんと思ひも寄らずといふのである。

かゝる自覺に立ちて、自己の宗とするところを開顯せんとす、果して如何なる道を進まんとするのであらうか。

是の故に龍樹菩薩は、不退の位を求むるに二種の道あり、一には難行道、二には易行道なりといはれた。難行道とは、五濁の世、無佛の時に於て、不退の位を求むる、之れが難行道である。それは唯自力ばかりで、他力の住持するものが無いからで、譬へば陸路を歩行するの苦しいやうなものである。易行道とは、信佛の因縁を以て、淨土に生れんと願へば、佛の願力によるが故に、即ち往生し、佛力の住持によりて即ち大乘正定聚に入る、正定聚は即ち是れ不退の位である。譬へば水路を船に乗れば楽しいやうなもので、之を易行道と云ふのである。

問ふ、菩提は是れ一なれば、修因も亦二ならざるべし、何故に此に在りて因を修し佛果に向ふを名けて難行とし、淨土に往生して大菩提を期するを乃ち易行道と名くるや。答ふ、諸の大乘經に説くところの一切の行法には、皆自力他力あり、自攝他攝がある。如何なるが自力なるか、譬へば人あり、生死を怖れて發心出家し、定を修して神通を發し、四天下に遊ぶが如き、名けて自力と爲す。如何なるが他力なるか、劣夫あり、己が自力を以て驢に擲てども上らず、若し轉輪王てんりんわうに従へば、即ち空に登りて四天下に遊ぶが如し、即ち輪王の威力かりきなるが故に他力と名く。衆生も亦爾り、此に在りて心を起し行を立つる、此れは是れ自力である。淨土に生れんと願へば、命終る時に臨みて、阿彌陀如來光臺を以て迎接し、遂に往生す、即ち他力と爲す。是の故に無量壽經には、十方の天人、我が國に生れんと欲する者は、皆阿彌陀如來の大願業力を以て増上縁と爲さざるはなしと説いてある。若しかくの如くならずんば、四十八願は即徒説である。語を後の學者に寄す、既に他力の乗すべきあり、自ら己が分にとどまりて、徒らに火宅に在ることを得ざれと勸告して居らるる。

九、聖道門、淨土門

五濁の世、無佛の時に、佛の住持力に依らず、唯自力のみで不退位に至らんとするは難行道である、此の道を名けて聖道門と云ひ、信佛の因縁を以て淨土に生れんと願へば、佛の願力によるが故に即ち往生し、佛力住持して即ち大乘正定聚に入る、之れが易行道である。而して此の道を往生淨土門と云ひ、略して聖道淨土の二門と云ふのである。道綽禪師だうしやくぜんじが、かくの如く佛教を二大別することは、誠に公明正大なる教判なりとして、干今至るまで、一般に常用して居ることである。而して道綽禪師は、此の聖淨二門に就て、その聖道の一種は今時證り難く、唯淨土の一門のみ通入すべき路なりと言つてある。聖道の一種何故に證り難いか、それは末法の今の時、大聖世を去りて時遙遠であり、所謂五濁の世無佛の時、人は愚癡盲昧にして智解甚だ微淺、唯知作惡、會無一善なるに、教理は無上甚深の法であるから、所謂教と時と人と相乖離して、たとひ行を起し道を修しても、一人として證得する者は無いからである。然るに往生淨土の一門のみが通入すべき道だ、それは有佛の淨土で、佛力の住持によるからである。佛力とは何か、佛の本願力である。無量壽經に佛の本願力を説いて言く、若し衆生ありて、

たとひ一生悪を造れども、命を終る時に臨みて十念相續し、我が名字を稱へんに、若し生れずば正覺を取らずと。當今の如き末法五濁惡世の人々の爲めに、特に開かれたる他力本願の大道である。それ中へに唯淨土の一門のみが、通入すべき路だと云ふのである。

人として自惚れの無いものは無い。即ちやつて出来ないことは無いといふ自惚れがあるから道を求むるに必ず善き道、勝れたる道に向つて心動く。そこに奮闘あり、努力も生ずるもので、この自惚れ、自負心は強ちに冷評し排斥すべきものではない。けれども、未だ以て眞實に己れを知るものと云ふことは出来ぬ。況んや善く見せたい、善く思はれたいと云ふ卑陋な心から、己れを偽り隠し、たゞ行ひ飾ることをのみ是れこととする、世間滔滔として皆然らざるは無い有様である。眞實に自己に覺醒するといふことは、頗る至難の事であるが、この自覺を出發點とし、第一歩としなければ、自己の行くべき道に向つて進むことは出来ない。果して如何にせば、眞實の自己を知ることが出来やうか。それは當つて碎くることである、之れぞと思ふ道に當面し、肉迫して、自己の能力を實驗することである。かくて轉々經驗を重ね行けば、必ずや「いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみ家ぞかし」と云ふ、眞實の自覺に達せずには居られない。道綽禪師は續いてかく云つて居らるる「又復一切衆生すべて自ら量らず、若し大乘に據らば、眞如實相第一義空、曾て未だ心を措かず。若し小乘を論ずれば、見諦修道に修入し、乃至那含羅漢、五下（欲界の煩惱）を斷じ、五上（色界無色界の煩惱）を除く、道俗を

問ふこと無く、未だ其の分あらず。縱ひ人天の果報あるも、皆五戒十善を爲して能く此の報を招く、然るに持得する者は甚だ稀れなり。若し起惡造罪を論ずれば、何ぞ暴風駛雨に異ならん。是を以て諸佛大慈、勸めて淨土に歸せしむ。縱ひ一形惡を造るも、但能く意を繋けて專精に常に能く念佛すれば、一切諸障自然に消除して、定めて往生を得しむ。何ぞ思量せずして、すべてゆく心なきや」と。

これは觀無量壽經の說法に、身を以て當つた眞驗味を示されたものである。九品の中の上中六品は、三福を修する善人で、下三品は三福無分の惡人である。三福とは世福、戒福、行福で、上の三品が行福（大乘の善）、中の上と中の中が戒福（小乗の善）、中の下が世福（人天の善）を修する善人である。いづれが果して自己の分限であらうかと、身自らこれに當つて見る。先づ大乘の眞如實相第一義空は云何、之を口にし、之を筆にするは、其の人に乏しくは無いけれど、之を實觀實照するに至りては、蓋し一人もあり得ない。然らば小乗修行は云何、五下五上の三界の煩惱を斷じ、那含羅漢の悟りを開かんこと、おぼろげの修行で出来ることで無い、誰れか身を以て之に當り得る者ぞ。然らば人天の果報は云何、これとて五戒十善を如實に修得しなければ、以て此の果報を招くことは出来ない。人皆萬物の靈長として、肩を怒らして横行濶歩して居るけれども、如實に人道を進める者幾人かある。かくて此の人世の果報を、再び招來することがどうして出来よう、況んや天上界の果報をやである。果して然らば、何事を爲し能ふのであらうか、「若し起惡造罪を論ずれば、何ぞ暴風駛雨に異ならん」欲を起し怨

を結び、憤激咆哮することは、其の猛烈なること、恰も暴風駛雨の如くである。之が自己の真相なることを、誰れか否定することが出来よう。此の自覺に達した時、進路全く閉塞し、道は茲に窮して了つた。窮せずば通じないが、窮すれば必ず通ずる。「是を以て諸佛大慈、勸めて淨土に歸せしむ」阿彌陀如來の他力本願、念佛往生の一道は、かゝる極悪最下の者の爲めに成就したまへる、極善最上の教へである。「何ぞ思量せずして、すべてゆく心なきや」と云ふが、道綽禪師の痛切なる勸誡である。

一〇、親鸞聖人の讃仰

親鸞聖人は、道綽禪師を讃仰して

道綽禪師付釋文七首

本師道綽禪師は

聖道萬行さしをきて

唯有淨土一門を

通入すべきみちととく

本師道綽大師は

涅槃の廣業さしをきて

本願他力をたのみつゝ

五濁の群生すゝめしむ

末法五濁の衆生は

聖道の修行せしむとも

ひとりも證をえじとこそ

教主世尊はときたまへ

鸞師のをしへをうけつたへ

綽和尚はもろともに

在此起心立行は

此是自力とさだめたり

濁世の起惡造罪は

暴風駛雨にことならず

諸佛これらをあはれみて

すゝめて淨土に歸せしめり

一形惡をつくれども

專精にこゝろをかけしめて

つねに念佛せしむれば

諸障自然にのぞこりぬ

縱令一生造惡の

衆生引接のためにとて

稱我名字と願じつゝ

若不生者とちかひたり

已上道綽禪師

といはれ、又『教行信證』の行卷には

道綽決聖道難證

唯明淨土可通入

萬善自力貶勤修

圓滿德號勸專稱

三不三信誨慇懃

像末法滅同悲引

一生造惡値弘誓

至安養界證妙果

と云はれ、蓮如上人これを釋して

道綽決聖道難證 唯明淨土可通入といふは、この道綽は、もとは涅槃宗の學者なり。曇鸞和尚の面授の弟子に

あらず、その時代一百餘歳をへだてたり。しかれども、井州玄忠寺にして、曇鸞の碑の文をみて、淨土に歸したまひしゆへに、かの弟子たり。これまたつゝに涅槃の廣業をさしきて、ひとへに西方の行をひろめたまひき。されば聖道は難行なり、淨土は易行なるがゆへに、たゞ當今の凡夫は、淨土の一門のみ、通入すべきみちなりと、をしへたまへり。

萬善自力貶勤修 圓滿德號勸專稱といふは、萬善は自力の行なるがゆへに、末代の機、修行することかなひがたしといへり。圓滿の德號は他力の行なるがゆへに、末代の機には相應せりといへることなり。

三不三信誨慇懃 像末法滅同悲引といふは、道綽禪師、三不三信といふことを釋したまへり。一には信心あつからず、若存若亡するゆへに。二には信心ひとつならず、いはく決定なきがゆへに。三には信心相續せず、いはく餘念間故なるがゆへにといへり。かくのごとくねんごろにをしへたまひて、像法末法の衆生を、おなじくあはれみまし／＼けり。

一生造惡値弘誓 至安養界證妙果といふは、彌陀の弘誓にまうあひたてまつるによりて、一生造惡の機も安養界にいたれば、すみやかに無上の妙果を證すべきものなりといへることなり(『正信偈大意』)と云はれてある。

更に親鸞聖人の『入出二門偈』には

道綽和尚解釋曰 月藏經言我末法

起行修道一切衆 未有一人獲得者
 在此起心立行者 則此聖道名自力
 當今末法是五濁 唯有淨土可通入
 今時起惡造衆罪 恒常如暴風駛雨
 本弘誓願令稱名 是爲穢濁惡衆生
 是以諸佛勸淨土 縱令一生造惡業
 三信相應是一心 一心淳心名如實
 若不生者無是處 必得往生安樂國
 生死卽是大涅槃 則易行道名他力
 と讚仰して居らるゝ。一誦再誦三誦して、止む能はざる法悦の涌き起るものがある。

一一、十二大門

安樂集一部十二大門は、先第一門に、觀無量壽經の題目に就て、一經の主旨を明らかにした、題は一部の總標なるからである。第二門には、觀無量壽經に就て、横に異執を起し、經の主旨を隠没せしむるものがある、故に其の異執を遣去して正道を明らかにした。第三門には茲に宗を立て、依るところを明示し、難行道易行道、聖道門淨土門の明判を樹立した。第四門には人動もすれば、その承くるところに疑議を挾むから、二門の立宗臆斷にあらず、師承するところあるを明示した。第五門には、淨穢を對比して、難を去り易に就かしめた。第六門には淨土亦十方に亘りて廣いから、十方西方を比較して特に西方を勧めた。第七門には、偏へに西方を取ること、若し有相なれば眞の解脱に非ず、故に相卽無相、無相卽相の眞理を鮮明して、疑團を氷解せしめた。第八門には、之れ亦聖説の明示するところなるを擧げて勸進した。第九門には聖説數多くして凡夫惑ふこと深し、故に淨穢の果報を比較して、厭忻の際を明らかにした。第十門には、厭ふべきは但娑婆の穢國なり、他方佛國の諸佛菩薩、同じく西方を指讚することを明して、忻求の心を決定せしめた。第十一門には、忻求の心既に決せば、須らく善知識によりて、如何に修行すべきことを明し、最後第十二大門には、上來の誨諭勸進凡を周備せるも、更に淨土の樂相を的示して、信を勧め疑謗を誡めてある。

十二大門、文を逐ふて其の次第をいへば、以上の通りであるが、若し義を以て之を論ずれば、十二大門分て二と爲すべし、一に立教顯宗、之れが前の四門である。二に勸進依行、卽ち後の八門である。前四門に明す難行易行、自力他力、聖道淨土の立教顯宗、茲に安樂集の中心は現はれ盡して居る。後の八門は、反覆之を述べて依行

すべきを勸進したものである。故に親鸞聖人の讃仰したまふところも、前四門の立教開宗を主として居らるゝのである。

二、疑義

唐の迦材の『淨土論』の序に「近代綽禪師あり、安樂集一卷を撰す。廣く衆經を引き、略ぼ道理を申ぶと雖、其の文義參雜、章品混淆、後の之を讀む者、亦躊躇して未だ決せず。今乃ち群籍を搜檢し、備さに道理を引き、勅して九章と爲し、文義區分、品目殊位せしめ、之を覽る者をして、宛ら掌中の如くならしむ」と云つてある。『安樂集』は文義參雜し、章品混淆して、讀む者躊躇して決しないから、今文義を區分し、品目位を殊にして、勅して九章とし『淨土論』と名け、讀者をして宛然掌中を覽るが如くならしむと云ふのである。稍々酷評に過ぎたりと云ふべきであるが、『安樂集』には、版本に古今ありて、古本殊に誤り多く、淨土宗の義山、之を讀みて之を思ひ、考訂重版して、句讀轉聲を正しくした。用意勤めたりと云ふべきであるが、惜らくは未だ錯簡あるを知らずとして、茲に『安樂集正錯録』を著した。之は江州日野の正崇寺、桃溪汝岱が考定し、嗣法の日溪法霖が辨疑を加へたるを、門人羽州酒田の道粹が録次して、豊前小倉の繼成が跋を書いてある。此の書錯簡を正すも

の集の上下に亘りて十餘ヶ所、當時既に物議を招きたりと見へ、編者道粹は「然るに當時の宗教師は、概ね古書一字を改易すべからずと言ひ、もし其の經それ缺ぎ、其の傳全からざるものに値へば、附會臆説して強顔自ら背く。是れ亦磴磴然たる小人のみ、何ぞ與に文を論ずるに足らんや」と云つて居る。藝州の石泉僧叡は近世の英俊で、學識と文才と他に匹なく、著書の豊富なる殆んど本派宗學界を風靡するの概あり。其の著『安樂集義疏』に此の『正錯録』を評して「桃溪何人ぞ、何ぞはなはだしく自由なる、吾れは取らざるなり。況んや亦高祖文類の引用、故に順ふて改めざるをや」と云ひ。又日溪が『安樂集』を以て「師の没後、門人揖授して艸々に卷を成す」と云へるに對しては、集の始めに「釋道綽撰」とあり、集の終りには「撰集流通」とある、親撰なること分明なり、何ぞ誣ゆるの甚だしきと云つてある。學者に依りて取捨するところはあるが『正錯録』の功も亦没すべからざるものあるを、否むべきでは無し。

1887

1887

1887

聖典講讀全集第九回配本・昭和十年八月十日印刷
昭和十年八月廿一日發行・編輯者宇野圓空・發行
者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎・印
刷者東京市牛込區改代町二四番地田中末吉・印
發行所小山書店・版權所有宇野圓空及小山久二郎